

〔結果〕実験モデルでは、線維化の進展に伴い小葉内で desmin と PDGFR 陽性伊東細胞が増加し、GFAP 陽性伊東細胞はコントロールで多く肝硬変の進展に伴い減少し、線維隔壁では、desmin, α -SMA, PDGFR, b-FGF 陽性伊東細胞が増加した。ヒト肝硬変では、小葉内では PDGFR 陽性伊東細胞が増加し、線維隔壁では、 α -SMA, b-FGF, PDGFR 陽性伊東細胞が増加した。

〔結論〕正常肝では静止状態の伊東細胞が見られるのに対し、肝硬変例では、著明に増加した活性型伊東細胞が隔壁の線維として認められ、肝硬変の主体は活性型伊東細胞であることが確認された。

肝細胞癌におけるアンジオエコーガイドの肝動脈塞栓術の検討

(消化器内科)

千葉三千代・斎藤明子・林 直諒

〔目的〕HCC の TAE 前に施行するアンジオエコーの有用性について検討した。

〔方法〕対象は HCC 55 症例 105 結節である。血管造影像とアンジオエコー像を対比した後全例で TAE を施行した。TAE 1 カ月後の造影 CT で壊死の状態を確認した。

〔結果〕① 105 結節中 23 結節 (21.9%) に所見の解離を認めた。② 解離率は治療歴、腫瘍径、存在部位別にみて有意差は認めなかったが、局所再発結節、S1, S5, 境界内部、右葉ドーム下に解離が多い傾向であった。③ 解離例では、アンジオエコーで結節全体の濃染像を確認後に TAE を施行した 21 結節は全例で TAE は有効であったが、血管造影の濃染所見のみで TAE を施行した 2 結節はいずれも TAE は無効であった。

〔結論〕TAE 前にアンジオエコーを施行し腫瘍の栄養血管を確認することは、より完全な TAE を行うために必須であると考えられた。

炎症性腸疾患の活動性評価における血清アミロイド蛋白の有用性

(消化器内科)

本間直子

炎症性腸疾患 (IBD) 156 例 (潰瘍性大腸炎 (US) 93 例, クロウン病 (CD) 55 例, その他 7 例) で、血清アミロイド蛋白 (SAA), CRP を測定し測定値と症状の関連を検討し、IBD 活動性の新たな指標として SAA の有用性を検討した。UC については内視鏡像との比較を行った。

SAA は CRP と相関したが、ステロイド長期・大量使用中の UC 例では CRP 陰性でも SAA 陽性であった。CD では再燃早期より SAA は変動し、その変動幅

は CRP より大きかった。UC では内視鏡的重症度に応じて SAA, CRP は高値となったが、ステロイド使用例では、特に CRP は抑制されていた。

以上より、ステロイド使用中の IBD において、CRP が陰性化しても SAA は陽性であった。SAA は CRP よりその変動幅は大きく鋭敏で詳細な経時的変化の検討が可能であり、IBD の活動性評価に有用であった。

マウス壊死性膵炎における IL-10 の投与効果の検討 (消化器内科) 福屋裕嗣

急性膵炎において proinflammatory cytokine である TNF α , IL-1 β が重症化に関与している可能性があり、IL-10 はマクロファージの活性化を抑制し、proinflammatory cytokine 放出を抑制することが知られている。今回セルレイン, LPS を用い、マウス壊死性膵炎モデルを作製し、IL-10 の治療効果を検討し、以下の結果を得た。

① 血清膵酵素値上昇は膵炎発症 12, 24 時間後で IL-10 投与により抑制された。② 組織学的に 12, 24 時間後で IL-10 投与により空胞形成、膵壊死が軽減した。③ 分子生物学に 3, 6, 12, 24 時間後で IL-10 投与により膵組織中 TNF α , IL-1 β mRNA の発現が抑制された。

以上により IL-10 は proinflammatory cytokine を介して膵炎の重症化を防止すると考えられた。

多発食道表在癌の発生母地に関する研究

(消化器外科)

伊藤裕之

1980 年から 1997 年に当科において切除された食道表在癌のうち、多発癌で組織型が扁平上皮癌であった症例は 41 例 (17%) であった。多発癌発生の背景と発癌機構の解明を目的として単発食道表在癌と比較して検討した。

背景因子では飲酒歴が多発癌で有意に多かったが、喫煙指数・年齢・性別・家族歴には有意差はなかった。肉眼型で多発癌で有意に陥凹型が多いのに比し、単発癌では有意に隆起型が多かった。重複癌も有意に多発癌で多く、特に頭頸部癌の重複が有意に多かった。続いて、発癌機構の解明を目的として免疫染色を行った。p53, Rb, COX2 の 3 種類について施行したが、有意差はないものの多発主病巣において COX2 の陽性率が高い傾向がみられた。

COX2 が癌の発育・進展・細胞増殖・血管新生の作用を有することより、多発癌の発生および進展への関与が示唆された。

幽門側胃切除術 B-I 法再建の問題点と対策—二重空腸囊 double tract 法再建の検討—